

国内での日本語教育と海外での日本語教育 ①

国内での日本語教育

「天理教の日本語教育」と一括りに言っても、大きく分けて国内で行われるものと海外で行われるものがある。国内で行われているものは、天理大学選科日本語科(1958年～1981年)、天理大学別科日本語課程(1981年～1996年)、天理教語学院(1994年～現在)と形を変えながら現在が続いている。この流れの目的は海外の天理教の子弟の育成である。天理教語学院のホームページでは、日本語科は次のように紹介されている。

教祖の教えを様々な文化圏の人々に正しく伝えるためには現地の言葉による教義の取り次ぎと、教理書の翻訳は欠かせない。さらに一歩進んで教えの神意を深く理解するためには日本語に習熟し、「原典を通して直接をやの声を摂取する」ことが肝要で、海外の道の子弟が日本語学習を行うことの意義は、まさにここにある。

海外からの留学生を対象とした日本語科では、

- (1) 基本教理の習得とその実践
- (2) 日本語を活かしての海外帰参者の世話取り
- (3) 帰国後、自国の伝道庁や出張所、教会等の一員としてつとめられる事

の三つを目標に、「聞く」「話す」「読む」「書く」の日本語の四技能の土台作りをするとともに、基本的な教理の学習、おてふり・鳴り物の修練も併せて行っている。

天理教語学院では、海外の天理教の子弟がおぢば(天理)に寄せられ、寮で寝食をともにしながら、学校に通い、日本語と基本教理の習得を目的に学んでいる。ホームページには「原典を通して直接をやの声を摂取する」とあるが、天理教の原典を日本語で読めるようになるには1年のコースでは無理であり、その下地作りをするための1年であると筆者は捉えている。天理教の原典は「おふでさき」「みかぐらうた」「おさしづ」があるが、慶応、明治の時代に記録され、または書かれたものであり、留学生が1年の日本語学習でとうてい読みこなせるものではない。しかし、天理教のつとめの地歌である「みかぐらうた」はひらがなで書かれて



天理教語学院の修練室

あり、入学当初から毎朝、修練室の前方にある大きく墨書された「みかぐらうた」を見ながら、留学生も職員と一緒にしておてふりを踊り、慣れ親しめるように指導されている。『天理教教典』は現代文で書かれており、各言語に翻訳もされているので、日本語科で留学生は前期(4月～7月)・中期(9月～11月)の間は、各言語に分かれ、各言語の担当教員により翻訳本も参照しながら教義の授業も週1コマ受けている。また週2コマ修練の時間もあり、天理教のおてふりや鳴り物を習っている。後期(11月～3月)は日本語も分かるようになり、日本語での教義の授業に切り替わる。特筆すべきは授業だけでなく、「全教一斉ひのきしんデー」への参加や夏の「こどもおぢばがえり」などの行事でひのきしん活動があり、習った日本語・教義を実践的に使う機会がある

ことが挙げられる。また天理市の教育委員会からの依頼で、市内の小中学校で国際交流会が年2回行われている。

おやさとふせこみ科

2018年現在、天理教語学院は「日本語科」と「おやさとふせこみ科」の2科体制になっている。おやさとふせこみ科は定員20名で、日本語科の定員40名に対し半分であり、日本語科を卒業した留学生の進路の一つでもある。こちらでも日本語教育は行われているが、時間数は日本語科約760時間に比べ、おやさとふせこみ科の日本語教育の授業時間数は約90時間ほどである。つまり日本語教育の比重は低く、教義の研鑽が主目的であることがわかる。ホームページでは次のように紹介されている。

おやさとふせこみ科の教育目的は、海外教内子弟を、将来それぞれの地域でお道のリーダー的役割を果たせるようばくくに育成することである。この科では、既に十分な日本語力を身につけている者が、おやさとを伏せ込みの場として教義の研鑽につとめ、信仰心を養う。そのため、原典をはじめ、教典、教祖伝に親しみ、より深く教義を学ぶと共に、おやさとのひのきしんを通して一層の成人を目指す。特に実習に重きをおき、おぢばでの様々な実習をはじめ、布教実習・教会実習では布教の家や各地の教会で布教活動を体験する。学生は所属教会の詰所を宿舍として、それぞれの教会とのきずなを深め、教理の実践や日本語の活用にも一層磨きをかける。世界各地から寄り集まった仲間との交流を通して、一れつきょうだいの教えを体得できるおやさとふせこみ科での学習は、将来、各地域で親神様の教えを伝え、人々を導く時、大きな力となり十二分に活かされるものと確信する。

上記の紹介文からも分かるように、すでに十分な日本語力を身につけ、教義の研鑽、信仰心を養うのが目的であるから、選考は厳しく設けられている。出願資格も、① 海外の教会長・布教所長の子弟、またはそれに準ずる者で、入学時によろぶくの者。② 本校日本語科卒業(見込み)の者、または「日本語能力試験」(N2または2級)以上に合格した者。③ 卒業後、将来自国においてお道の用務に従事する予定の者、となっている。筆者はおやさとふせこみ科の日本語の授業も担当しているが、N1レベル合格を目指した授業を行なっている。実習も多く、宿舍も所属教会の詰所となるため、日本語を使う機会も多い。卒業後には、世界各地の天理教の拠点でリーダー的な役割を担える人材の育成に当たっている。もともと天理教海外布教伝道部(現・天理教海外部)にあった「おやさとふせこみ課程」が、1994年の天理教語学院開校に合わせて吸収され設置された科である。つまり天理大学別科日本語課程が「日本語科」に移行し、海外布教伝道部内にあった「おやさとふせこみ課程」が「おやさとふせこみ科」として移行したわけである。

以上、天理教語学院日本語科とおやさとふせこみ科の紹介から、その目的とするところを述べてきたが、やはり両科の主目的は海外の天理教の子弟の育成であり、世界だすけのための人材を育成することだと言える。